

サヨナライクメン。

脱・ブーム宣言

☆2

男たちは一定の距離を保って立っている。互いに目配せしながらも、不用意には近づけない緊張感。

「子どもと昼間の公園に行く」とそんな感じ。参観日でも似たような距離感がある。6歳と3歳の子を持つ男性会社員(37)は苦笑する。「何で母親が連れてないんだらう、なんて余計なことが頭をよぎる。向こうも同じこと思ってるでしようね」。ママたちにならよく話し掛けられるし、気楽に対応できるのに。

別の男性(34)は家事も3人の子の世話も苦にならないが「家ではイクメン」にしても、外では家庭の気配を消して、一人の男と見られたい。男の性が分かるかなあ。慣れない、照れくさい、格好つきたい。そしてこびり付いた役割意識が、男性同士の「パパ見知り」の根底にある。

小津智一さん(38) | 福岡

市は昨夏、自身が住む賃貸マンションで「パパ友」づくりを仕掛けた。「笑っている父親を増やそう」をコンセプトに活動するNPO法人「ファザリング・ジャパン」の九州支部代表だが、足元ではパパ見知りを実感してきた。

「近所付き合いは『ママ経由』で、妻の後ろに付いていくだけ。積極的に前に立つことがなくて面白くない」。未就学児がいる父親に絞って、手製のチラシを配るところから始めた。5、6人の父親と居酒屋で「交流会」を重ねてきた。

「パパ見知り」打破

「交流会」を重ねてきた。会釈だけだった関係から、自分子ども以外にも声を掛け、互いに関心を寄せ合うようになった。「地域の目」を感じる。入れ替

わりの激しい賃貸マンションだが「子育て世代にとって数年間を安心して暮らせる価値は大きい」と思う。親として家庭に目を向けるようになったら、自然と地域へ視点が広がった。パパ友との会話は、会社の人間関係の中で交わすのとは別物だ。「新しい生き方を早く身に付けることが、この先を生きやすくする」。次は、家族も一緒に参加できる催しを練っている。

九州全体に目を転しても「イクメンブーム」のこの

1年、20、30代の若い父親を中心に、新たなつながりを求める動きが相次いだ。大分県内で活動する「パパトーク」はその一つ。5人がイベントなどで幼児向けに読み聞かせをする。昨年、同県が企画した父親向け育児講座の受講者が、自主活動として始めた。

世話人で会社員の大西正久さん(42)「大分市」は、小中学生の父親を中心に地域活動に取り組む「おやじの会」にも携わる。若い世代の集まりには「圧倒的な発信力と発信する姿勢」を感じるという。メーリン



マンション内パパネットワークの会合後。盛りがたくて立ち話は続く

新 男 女
シリーズ第2部

「ランドセルはどう選ぶ?」「アトピーへの対応は?」「子どもがお風呂を嫌がる」。大西さんから九州各県の父親45人が登録するメーリングリストでは、育児相談が行き交う。子どもと接するからこそ生まれる悩み、疑問だ。

「とはいえイクメン」をやってきた男性は、昔から地域に「点」では存在してたんです。それが「面」でつながり始めた。しかも、速さと広さの飛躍的な伸びを伴って。インターネットという触媒が、イクメンをブームへと押し上げたといえるかもしれない。

ただ、広く浅くはネット社会の常。この先、パパ友の輪は深みを増していくのだろうか。(畑中知子)

生活

FAX 092(711)6243
メール bunka@nishinippon.co.jp